

## 第5章 千葉大生の生活と意識

### はじめに

本章は、全体を3つの節に分け、この20年間の学生数の推移、物質的側面からみた学生生活、学生の意識についてみる。

第1節は、学部学生・大学院生・外国人留学生の数の推移を示している。学部学生では志願者の状況・学生数・出身地・進路について、大学院生では学生数と進路について、外国人留学生では学生数・出身地域・区分についておよその状況がつかめるようになっている。

1980～1990年代の学生は、消費化・情報化が急速に進展した時代に育ったが、彼らが大学生活をおくった時期は、この傾向がさらに強まった時期でもある。第2節では、彼らの出身家庭、収入と支出、住居、持ちモノ、読書、レクリエーション、課外活動などをとおして、学生生活の物質的側面をみる。

第3節は1980～1990年代の学生の意識を探る。ここでは、限られた資料からではあるが、彼らの意識を再構成し、千葉大生のアイデンティティ、学生間の人間関係をどう考えているのか、政治意識、社会運動への関心と参加意識について述べる。

図1 5 1 平均的な千葉大生（1985年の『千葉大生白書』より）



## 第1節 数でみる千葉大生

### 第1項 学部学生

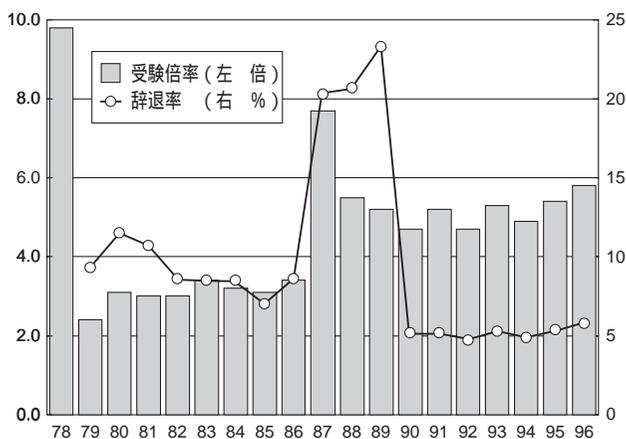
#### (1) 入学試験

図1 5 2 aは、『入学試験に関する調査』をもとに作成した、受験倍率と辞退率である。1期校・2期校制の最後の入試となった1978年の受験倍率は9.8倍であったが、共通1次学力試験が導入された1979年は2.4倍と4分の1に激減した。その後、1986年まで3.0~3.4%で推移する。

辞退率は7.0~11.5%と10%前後で推移した。この時期の共通1次学力試験は、5教科7科目を一律に課すことによって、成績による大学の序列化が顕在化し、「輪切り」による進路指導が行われた。また、大学の受験機会が1回になったことに対する不満が批判の対象となった。

1987年から、共通第1次学力試験の科目数が、5教科7科目から5教科5科目に減った。また2次試験でも、国立大学・学部をA、Bの2グループに、公立大学・学部をA、B、Cの3グループに分けてA、B、Cの順に試験期日を設定して入学者選抜を実施する「連続方式」が導入された。これによって、受験者は異なる2つの大学・学部（公立大学のグループを含めると3校）を受験できるようになった。本学はBグループに属し、入学者選抜を実施することとなった。この年の受験倍率は一気に7.7倍に跳ねあがった。しかし、第2次試験の出願では、第1段階の選抜（足切り）で大量の不合格者が生じる事態となった。また辞退率も20.3%と従来の倍に増えた。1988、1989年の受験倍率は5.5、5.2倍であったが、辞退率は20.7、23.3%と高率のま

図1 5 2 a 受験倍率と辞退率の推移

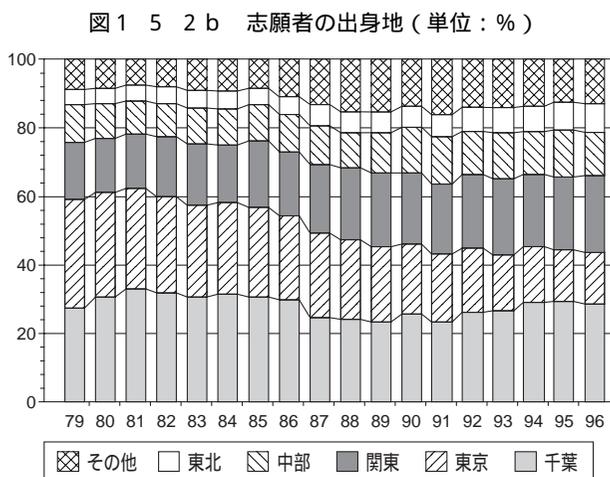


までであった。

1990年から、共通第1次学力試験に代えて、大学入試センター試験が実施された。また、1989年から「連続方式」に加え、定員を前期と後期に分割して入学者選抜を実施し、前期に合格し、入学手続きをした者は後期日程の試験を受験できない（合格としない）こととする「分離・分割方式」が併用された。本学では、1990～1994年の間、教育学部は「連続方式（A日程）」、他の8学部は「分離・分割方式」で入学者選抜を実施した。1995～1996年は、教育学部（小学校教員養成課程を除く）のみが「連続方式（A日程）」を実施し、他の学部・学科はすべて「分離・分割方式」による入学者選抜を実施した。1990～1996年の受験倍率は4.7～5.8倍で推移し、辞退率も4.7～5.8%と低くなった。

図1 5 2 bは、『入学試験に関する調査』をもとに作成した、志願者の出身地である。

千葉県の志願者は、1979～1981年に27.4%から33.0%に増加した後、1982～1986年は30.0～31.8%で推移した。しかし1987年に24.7%に減少し、1988～1991年は1990



年の25.8%を除くと24.0～23.4%に減少しつつあった。1992～1995年は26.3%から29.1%に増加している（1996年は28.7%）。また東京都の志願者は、1979年の31.8%から1996年の14.9%に毎年減少しつつある。

これに対して、千葉県・東京都をのぞいた関東地方の志願者は、1980年に15.9%まで減少したが、その後は一貫して増加しており、1996年には22.2%になっている。中部地方の志願者は、1981年まで9.5%に減少したが、その後増加し、1995年には13.6%に達した。また東北地方の志願者も、1980年に4.6%まで減少したが、その後は増加し、1996年に8.2%に達した。それ以外の地域の志願者は、1979～1985年には1984年の9.2%を除くと8%前後で推移し、1986年に10%をこえた。1987～1996年は13～16%の間を推移している。

第1節 数でみる千葉大生

(2) 学生数と出身地

図1 5 3 aは、『千葉大学学報』をもとに作成した、学部学生の数である。1979年に8,789人であった学部学生数は、1984年に1万人を突破し、10,170人となった。1980年代における第2次ベビーブームによる18歳人口の増加に対応する学生の臨時増募によって、学生数は増加し、1995年

には12,277人に達した。その後は減少に転じ、1997年の学生数は12,105人である。女子学生数は、1979年には2,489人（全体の28.3%）であったが、1985年には3,042人（29.6%）となった。その後も増加をつづけ、1994年には4,070人（33.3%）となり、1997年は4,441人（36.7%）となっている。

1997年の各学部の学生数は、文学部992人、教育学部2,309人、法経学部1,968人、理学部963人、医学部615人、薬学部346人、看護学部358人、工学部3,590人、園芸学部964人である。

図1 5 3 bは、『千葉大学学報』をもとに作成した、学部学生の出身地である。千葉県出身者は、1979～1985年に25%から34%に増加した後、1985～1991年に34%から20%に減少し、1991～1996年に20%から24%に増加している。また東京都出身者は、1979～1980

図1 5 3 a 学部学生の数（単位：人）

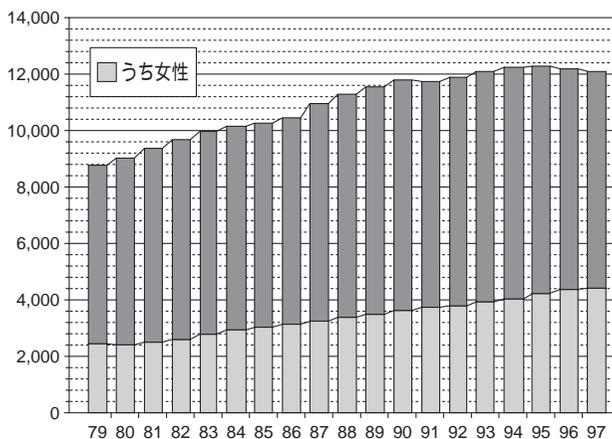
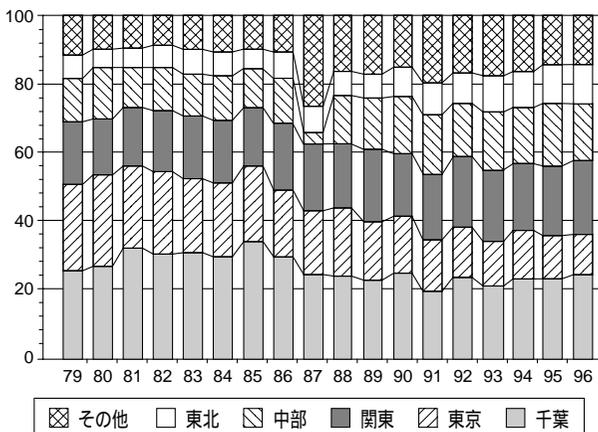


図1 5 3 b 学部学生の出身（単位：%）

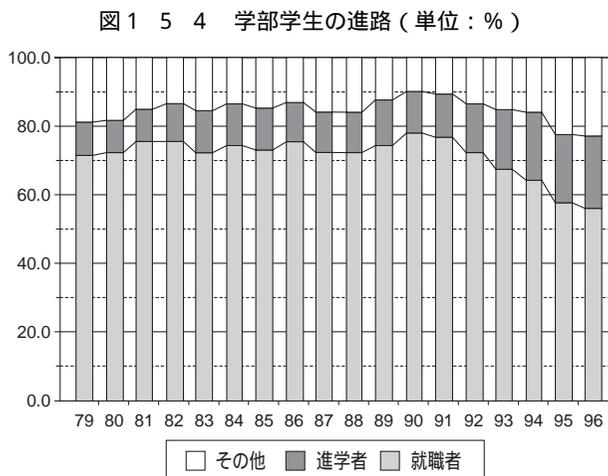


年に25%から27%に増加した後、1996年の12%に一貫して減少している。千葉県・東京都を除いた関東地方出身者は、1980年に16%まで減少したが、その後は一貫して増加しており、1996年には22%になっている。このため千葉県と東京都の出身者は、1979～1985年には50%以上を占めてきたが、1986年に50%を割り、1991年には40%を割って、1991～1996年は35%前後で推移している。また関東地方出身者は、1979～1986年には70%前後を推移してきたが、1987～1990年に60%前後に低下し、1991～1996年には55%前後まで低下している。

これに対して、中部地方出身者は、3%に激減した1987年を例外とすると、増加しており、1995年には19%に達している。また東北地方出身者も、1980年に6%まで減少したが、その後は増加し、1996年に12%に達した。それ以外の地域の出身者は、1979～1986年には10%前後で推移し、1987年に例外的に26%に増え、その後も15～20%の間を推移している。しかし1995～1996年には15%を下まわっている。関東以外の出身者は、1979～1986年には30%前後にすぎなかったが、1987～1991年に増加し、1991～1996年は45%前後を占めている。

### (3) 進 路

図1 5 4は、『千葉大学学報』をもとに作成した、学部学生の進路であり、それを就職・進学・その他に分けたものである。これによると、1979～1990年は、就職が71.7～78.4%、進学が9.5～13.2%、その他が9.7～18.4%で推移してきた。しかし1991年から就職が減少し、1996年に



は56.3%になった。これに対して、進学とその他が増加し、1996年にはそれぞれ21.0%と22.7%になった。この変化の原因の1つは、本学の大学院が充実し、そこへの進学が増えたことである。しかし同時に1991年以後の不況で就職がむずかしくなったことがあげられる。学部別にみると、理系の学部では、もともと大学院への進学の

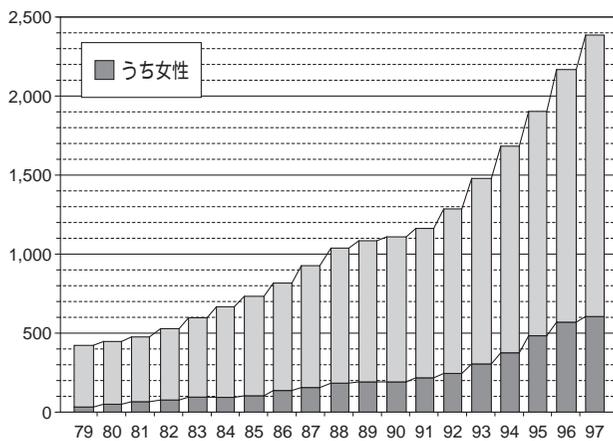
## 第1節 数でみる千葉大生

比率が高かったが、1990年代になるとその傾向がより強くなった。文・教育系の学部では、就職でも進学でもない、その他の比率が大きくなった。1996年をみると、法経学部で25.1%、文学部で28.3%、教育学部では40.3%であり、不況の深刻さを示している。

## 第2項 大学院生

図1 5 5 aは、『千葉大学学報』をもとに作成した、大学院生の数である。大学院生数は、1979年には423人であったが、1982年には529人となった。1988年には1,038人となり、1994年には1,683人、1996年には2,170人となった。1997年の大学院生数は2,387人である。女子大

図1 5 5 a 大学院生の数（単位：人）



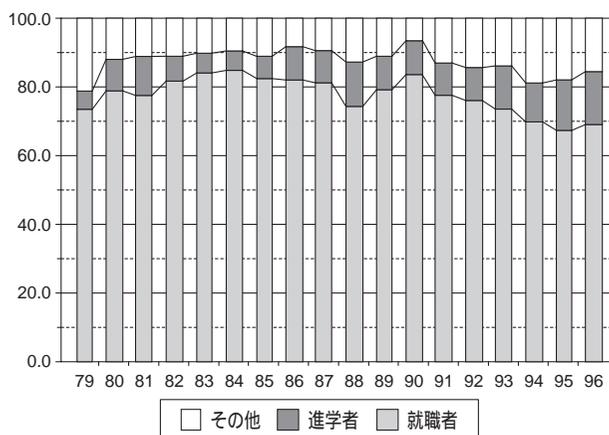
学院生は、1979年には36人（8.5%）であったが、1985年に110人（15.0%）となった。1993年に331人（21.0%）、1995年には489人（25.7%）となった。1997年の女子大学院生は613人（25.7%）である。

1997年の修士課程と博士前期課程の大学院生は1,564人で、博士課程、博士後期課程および後期3年課程は823人である。各研究科の大学院生数は、文学研究科（修士課程）71人、教育学研究科（修士課程）151人、社会科学研究科（修士課程）40人、医学研究科（博士課程）324人、薬学研究科173人（博士前期課程139人、博士後期課程34人）、看護学研究科97人（博士前期課程60人、博士後期課程37人）、社会文化科学研究科（後期3年課程）62人、自然科学研究科1,449人（博士前期課程1,083人、博士後期課程366人）、理学研究科（修士課程）2人、工学研究科（修士課程）14人、園芸学研究科（修士課程）4人である。

図1 5 5 bは、同じ資料による、大学院生の進路であり、それを就職・進学・その他に分けたものである。進学とは、この場合、修士課程から博士課程への、あるいは

は博士前期課程から博士後期課程への進学である。これによると、1979～1990年は、就職が73.6～85.0%、進学が5.5～12.9%、第2次石油危機の1979年(20.9%)を除くと、その他が6.3～12.6%で推移してきた。しかし1991年から就職が減少し、1995年には67.4%になった。それに対して、進学とその他は増加し、進学は1996年に15.3%、その他は1994年に18.8%になった。

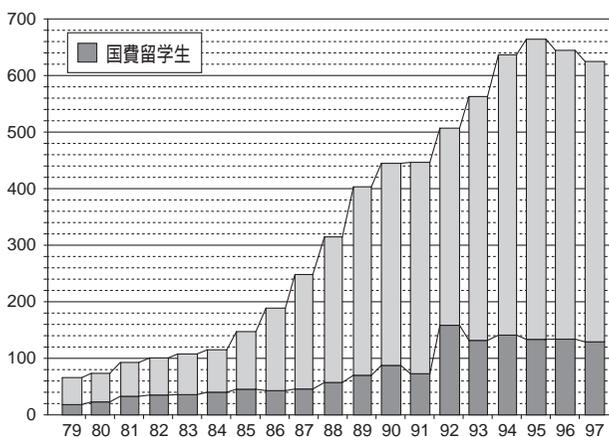
図1 5 5 b 大学院生の進路(単位:%)



### 第3項 外国人留学生

図1 5 6 aは、『千葉大学学報』および『学生生活のために』をもとに作成した、1979～1997年の外国人留学生数である。この間、留学生数は飛躍的に拡大し、1979年の64人から1995年には10倍をこえる665人となった。現在ではやや減少して625人(1997年)となっている。国費留学生も

図1 5 6 a 外国人留学生数(単位:人)



1979年の17人から1992年には158人に増加し、現在では130人(1997年)となっている。この拡大の原因としては、政府による留学生受入れ数の拡大をめざした「留学生受入れ10万人計画」(1983年8月)があげられる。本学でも、1991年4月に留学生センターを設置し、1996年10月には海外の協定校の学部学生を対象に英語で授業を行う

第1節 数でみる千葉大生

「千葉大学短期留学国際プログラム(J PAC)」を開設した。

図1 5 6 bも、同じ資料による1979~1997年の外国人留学生の区分別の比率である。これによると、学部生と研究生は減少しつつあり、大学院生が増加している。学部生は、1980年に40.3%いたが、1981~1988年は30%台、1989~1992年は20%台に減少した。1993~1995年は再び30%台に戻るが、1996~1997年と20%台に減ってきた。研究生は、1979年には40.6%を占めていたが、その後は減少し、1996~1997年には20%を下まわった。これに対して大学院生は、1979年には18.8%であったが、1980~1985年には20%台、1986~1995年は30%台(1989年は29.0%)に増加し、1996~1997年には40%台になった。

図1 5 6 cも、同じ資料による1979~1997年の外国人留学生の出身地域である(カナダとアメリカ合衆国を「北米」、メキシコからパナマまで



写真1 5 1 アラバマ大学での語学研修

図1 5 6 b 外国人留学生の区分(単位:%)

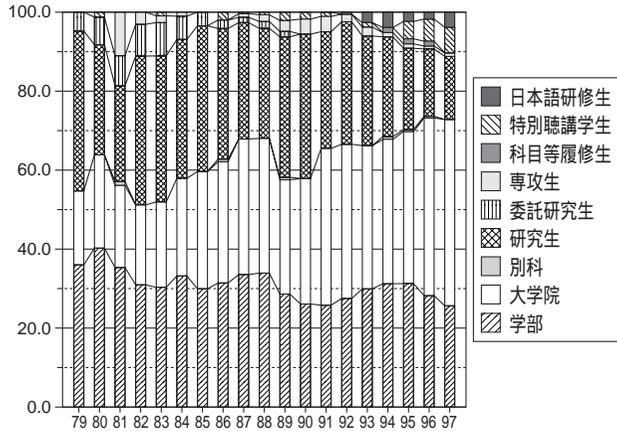
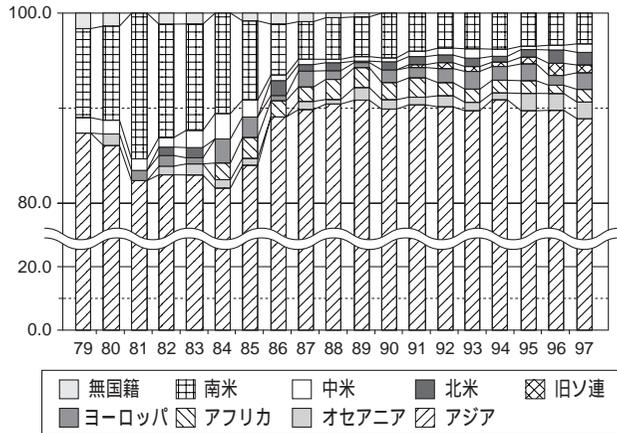


図1 5 6 c 外国人留学生の出身地域(単位:%)



を「中米」とした)。それによると、アジアが圧倒的に多く、1979～1987年は80%以上、1988年からは約90%を占めている。ついで南米であるが、1980年代前半までは約10%を占めてきたが、1980年代後半は4%台、1990年代になると3%台に減っている。国・地域別では、1979年は台湾、大韓民国(韓国)、タイとインドネシア(同数)の順であった。その後、1980～1984年は台湾、中華人民共和国(中国)、タイの順、1985～1986年は台湾、中国、韓国の順、1987～1989年は中国、台湾、韓国の順、1990～1994年は中国、韓国、台湾の順であった。最近の1995～1997年は中国、韓国、マレーシアの順であった。とくに中国は1990年代になると全体の外国人留学生の約半数を占めるようになった。

## 第2節 1980～1990年代の学生生活

本節では、1980～1990年代の学生生活をモノや情報といった物質的側面からみていきたい。

### 第1項 千葉大生の出身家庭

図1 5 7 aは、『学生生活実態調査』をもとに作成した、父親の職業である。父親の職業を、給与所得者(企業勤務・公務員・団体職員)自営業者(中小企業経営・自営業・自由業)農林水産業、ほか(その他・無職・就労なし)に分けると、給与所得者は増加し、自営業者は減少して

いる。給与所得者は、68.2%(1982年)だったのが、69.8%(1986年) 72.8%(1990年) 82.3%(1994年)と増加している。これに対して、自営業者は、

